

特 集
5周年を迎えて
「忠順翁を語る」
シンポジウム

目 次

- ・千卷舎石碑詞
- ・発足五周年
記念シンポジウム…………… 1
「忠順を語る」
- ・編集後記……………17

表紙写真 - 石碑詞

村上忠順翁顕彰会報

第 4 号

編集 村上忠順翁顕彰会

事務局

発行 平成5年10月20日

千卷舍碑詞

題額 蓬廬 熾仁



天乃下爾百八十種登佐波奈留寶能中通勝禮王米傳多伎御寶三者書耳那武有氣留又八百萬千萬登於保迦留人能中尔努祁伊傳王等支波書好美王與玖讀人耳邪理氣留佐疏人者以登以登稀良奈留王參河國碧海郡堤乃里迹其人有祁理村上忠順翁姓波源字乎承卿登伊布村上天皇皇子中務卿具平親王與理十五世孫伯耆守村上長年朝臣乃喬尔豆父者忠幹母者美志子深見氏奈利文化九年四月朔日爾生禮低人登那理君耳仕留道親思乃心深支波伊布毛更那理妻子遠伊都久之美波良加羅乎武都備文賀喜乎志多斯美已乎正之久斯人能善乎免傳氏波以豫々進米惡乎見豆波戎米幾多實佛道漢學乃害有乎悟理神道乃上母無久尊伎事遠阿喜良咩氏世乃為國乃為尔思遠深米身遠脩米家遠齊信驕良受客那良受萬乃淤許奈比曾那波理多留母伊登表佐那玖斯王手加文書與美歌詠米詩作里奈村志揚卷乃頃與理畫波物食布保騰毛迦當弊尔比呂氣於伎夜波机迹与理奈賀良露遜可利乃村路牟保哥波書看勢万半那久都登米多礼婆奈理祁利側謠耶畫耶誹諧歌耶登以刀若伎時乃心慰耳春佐備斯母伊多利深支賀故奈留倍志然礼村詩者舌陀弥多流衣美之詞奈利登王後爾波作良受歌乎能美常迹與牟尔母花耶迦尔奈万米伎多流又巧那流迹半安良傳上津代乃直久正久武玖雄雄志玖實有乎武祢登都刀米良礼家業登阿留醫師乃道波本与理尔豆大和毛漢毛名有師迹都喜天廣久學備伊曾之美且其於久賀乎極米父乃職乎繼三刈谷乃里志良舞々殿尔仕倍其君乃許波斯乃麻々迹々語孝經老莊孫子源氏物語奈村王村伎教弊万都利又年年爾古

事記祝詞古語拾遺萬葉集○玉集散木奇譚集和名類聚鈔乎櫻記之名所禁神禰略記玉櫛詞
乃玉鬘雅語譯解拾遺論草登伊布書号毛乎集米著述之三藻管藻文之差我野千代古道元治
千首等乃歌集乎集米隨筆者蓬乃杣蓬廬談奈村阿理如久都登米以多追伎忘學乃力乎慕
飛來底物習布教子等家乃名迹都祁留蓬乃杣奈斯三門之勢耳都村布麻尔麻其名雲井尔聞
曳安凱三明治元年三月大總督有栖川宮能召迹從比低 朝廷你忘心乎盡志同二年其國府
奈留修道館乃助教登那理同三年宣教使乃命表蒙留今年其遠澤祖乎齋久祀祭又葬乃事奈
村須倍三神代乃法迹如幣志努三河國耳彦袖司乃外尔波此家序初奈利祁留同五年祠官同
六年少講義登次次耳補任並良礼提仕奉留毛迦斯許喜惟神之道遠比多夫留迹導武心乃厚
支尔依三奈留倍之翁甚弱伎頃与理安良迹流書乎視聽迹忘多賀飛三毛登米三志寫之取母
志氏伊迹之年既耳四萬卷尔萃餘礼留乎安留賀字倍迹云伊耶佐波耳安良万保之喜波書那
理登豆猶月迹日迹珍良志伎乎購比曾幣通造文庫造三棚板毛多々和々和々耳横山奈須積
那倍提千卷舍登名付三遠長久後世尔傳布倍俱物勢良礼之波加乃天那流御倉棚乃神毛加
万祁給良牟迦斯阿奈多具飛奈能慮那加加留功績乃高伎尔久羅辯三此庫乃北窗余離美
空遥二仰藝見留越乃白山毛飛伎加利奈年安那米傳多

天地乃共耳久志俱都多倍武登多三新布美具良見礼返多布等斯

明治七年五月十三日

紀伊國熊野坐神社權官司十等魚中謹義

熊代繁三

三河國額田郡岡崎隱士

三宅道熙書

同國新堀村

深見篤慶建

嶺田寅吉作

石川文山研究会

岩月碧水寫

千卷舎碑詞

題額蓬廬熾仁

□ □

天の下に百八十種とさなる寶の中に勝りてめでたき御寶主は書になむありける。又八百萬千萬と

多かる人の中にぬけいでて尊きは書好みてよく讀む人にざりける。さる人はいいと稀なるを、參河國

碧海郡堤の里に其人ありけり。村上忠順翁姓は源字を承卿といふ。村上天皇皇子中務卿具平親王

より十五世の孫伯耆守村上長年朝臣の裔にて、父は忠幹、母は美志子、深見氏なり。文化九年四月朔日に

生れて、人となり君に仕る道、親を思ふ心深きはいふも更なり。妻子をいくしみ、ばらからをむつび友がきをしたしみ、己

を正しくし、人の善をめではいよすすめ惡をみては戒めきため佛道漢學の害有るを悟り、神道の上も無く尊

き事を明めて、世の爲國の爲に思ふ深め身を脩め、家を齊へ驕らず吝ならず萬のふこなき備りたるものとあき

なくして手書き書よみ、歌よめ、詩作りなどし、揚卷の頃より晝は物食ふほどもかたへにひらげあき、夜は机によりな

から露ばかりまどろむほかは、書みぬまは、なくとめたればなりけり。側誣や畫や誹諧歌やといと若き時の心慰

にすさびしもいたり深きが故なるべし。然れど詩は舌だみたる夷詞なりとて後には作らず。歌をのみ常によむに

もはなやかになまめきたる。又巧なるにはあらで、上つ代の直く正く武く雄々しく實あるをむねとつとめられ

家業とある醫の道は本よりにて、大和も漢も名ある師につきて、廣く學びいそみて其おくがを極め、父の職

を繼て、刈谷の里しし殿に仕へ其君のこはしのくにまに、論語・三經、老莊、孫子、源氏物語などを釋訓へ

奉り、又年年に古事記・祝詞・古語拾遺・萬葉集・金三集・叢木・歌集・和名類聚抄を標註し、名所采・

神號略記・主禰・詞の王・賢文・雅語譯解・拾遺論草といふ書どもを編集し、著述し、王藻・菅・深・文・史・

崖我野千代の古道元治千首の歌集を集め、隨筆は蓬の杓、蓬廬歌談などあり。かくつ

とめいたつきし學の力を慕ひて、物習小教へ子など家の名につける蓬の杓なして、門も狹につと小まにまに

其名雲井に聞えあげて、明治元年三月大總督有栖川宮の召に従ひて朝廷に忠心を盡し、同二年其

國府なる修道館の助教となり、同三年宣教使の命を蒙る。今年其遠一祖を齋く、祭り又葬の事

など総て神代の法にかへしぬ。三河國にて神司の外には此の家を初なりける。同五年祠官同六年少講義

と次次に補任せられて仕へ奉るも、かしこき神の道をひたぶるに尊む心の厚きによりてなるべし。翁甚弱き頃よ

り、あらゆる書を視聽にしたがひてもとめもし寫しとりもして、いにし年既四萬巻にも餘れるをあるがうへにも

いやはにあらまほしきは書なりとて、なほ月に日に珍らしきを購ひそへつ。文庫つくりて棚板もたわわに横

山すつみなべて千巻舎と名附て、遠長く後世に傳ふべくものせられしは、かのあめなる御倉棚の神も感け給らむ

かし、あなたぐひなのおもひはかりやかかる功績の高きにくらべては、此倉の北窓より美空遙かに仰ぎみる越の白山も低かりなむ。

あなめでた。天地のむたに久しくつたへんと、たてしふみくらみればたふとし。

明治七年三月十三日 紀伊國熊野坐神社 権宮司十等兼中講義 熊代敏里

三河國額田郡 岡崎隠士 新堀村 三宅道熙書 深見篤慶建

山崎五郎平記念文庫 山崎五郎平記念文庫 山崎五郎平記念文庫 山崎五郎平記念文庫

村上忠順翁顕彰会

発足五周年記念シンポジウム

「忠順翁を語る」Ⅱ 限りなく忠順像を求めてⅡ

講師

文学博士 築瀬一雄
刈谷市中央図書館 平野大治
女流作家 矢萩美也子
野見小学校長 近藤銈司



司会 本日の大変意義深いシンポジウムに際し司会という大役を仰せ付けかりました当顕彰会事務局の田中伸一でございます。不馴れなうえ不勉強でございます、皆さんの協力によりこの責任を果たさせて頂きたいと思っておりますどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、平成に年号が改った元年一月二十二日、私たちのふる里に歴史を極め、文化の香を高めようと発足した「村上忠順翁顕彰会」もおかげさまで早や五年目を迎えることが出来ました、本日ご出席の築瀬先生、平野さんには常々格別のご指導とご支援を賜っています。ここに厚くお礼を申し上げます。

又会員の皆さまには、大変ご支援を頂き感謝しております。

過去四年間のあゆみは、主に忠順集の復刻、忠順の足跡をたずねて歴史探訪など楽しい旅を重ねて参りました。発足当時の会員数四一五名現在三八〇名であります。

ふり返り会員が今どうしても知り

たいと思うのは忠順翁はどんな人であったのかつまり忠順像ではないでしょうか。

本日のテーマについては、いかにも上段に構えて、シンポジウムなどという大げさな名称をつけてしまいました。これはむしろ「忠順を語る会」とか或いは「集い」の方がよかったかも知れません。そんなことを心配しながら今日の会議を進めさせて頂いております。

本来ならばシンポジウムは、最初に基調講演をして頂いて、その後各パネラーの先生方からご発言を頂き、話題を広げ、そして深めて行くというのが一般的な進め方かと思えます。しかし、今日は、そうした峠を脱ぎすて時間を有効に使い効果的に進めたいと思います。言ってみれば変則方式で会を進めていきたいと思っております。

そこで進め方ですが、まず、三人の方、正面左から平野さん、矢萩さん、近藤先生にまずご発表頂いて、最後に築瀬先生がしめくくる形でまとめ頂くという方法でお願いしたいと思っています。

本日の会は、始めから討論をしつゝして結論を求めようという会ではございません。

あくまでも忠順翁の人となりを知っていたいただき皆さんと共に学んでいきたい。

サブテーマも、皆さんの資料にあるとおり。

「限りなく忠順像を求めて」ということでお願いしたいと思っております。又、これが今日の目的でもあります。

終始なごやかに会を進めていきたいと思っておりますのでよろしくご協力をお願いいたします。

今日の四人の先生のお話を聞くことにより、これを重ね合せますと立体的な忠順像が浮んでくるのではないかと期待しています。

本日は大変多くの方々の出席を得ておりますので早速く始めたいと存じます。

講師の紹介をさせて頂きますが、発表して頂く順序でご紹介させて頂きます。

向って一番右が近藤銈司さんです。お住いは隣の西岡町です。皆さんよくご存じの地元の先生で、現在野見小学校の校長先生であります。忠順につきましましては、市の教育委員会発行の「とよたの人物記」で村上忠順を担当されました。又最近では、県の教育文化振興会発行の「教育と

文化」に投稿されまして「透徹した心で維新を支えた国学者村上忠順」と題して発表しておられます。なお先生は、当顕彰会の会員でもありません。いろいろな面において、又特に顕彰会事務局には格別ご協力を頂いております。

先生には、忠順翁の全体を踏えて発表して頂きその中で忠順像についてふれて頂くようお願いしてあります。幕末において国学を極めた忠順についてよく研究をしておられます。近藤銈司先生でございます。

つぎに平野さんをご紹介させていただきます。

お住いは大府市であります。お勤めは刈谷市立中央図書館です。村上文庫に精通しておられ、刈谷図書館において、忠順の研究に関しては第一人者と申しても過言ではないと存じます。私達会員が去る平成二年十一月二十五日にバスで村上文庫を見学させてもらったときには親切に、常には門外不出の忠順の図書を会議室に並べて下さいまして説明もして頂きました。又特に忠順の印譜についてもご講話も賜りました。たびたび刈谷図書館を訪れることがありますが、二階へ参りますといつもにこにこした平野さんにお目にかかる

ことが出来ます。平野さんには文庫を通して忠順像を語って頂く手はずをお願いしております。

なぜか今日の講師三人が大府の方であります。まず大府の人の先鞭を切って発表して頂く平野大治さんです。

つぎに、今日の紅一点矢萩美也子さん、皆さんのパンフレットにもご紹介させて頂いていますが、この方も大府市の江端町にお住いです。ほんとうに大府の方にご縁が深いわけで今日は雨の中を遠くから来て頂きました。

皆さんのパンフレットには女流作家と書かせて頂きました。今日は後ほどそのことについて一言お話しがあるかも知れませんが、私の方が勝手にきめさせて頂きまして、女流作家ということで紹介させて頂きます。その理由につきましては「江戸期の女考」東京世田谷の柱書房から出版されました書籍に島原「輪違屋」の遊女桜木について執筆し発表しておられます。そうしたことから女流作家と勝手に決めさせて頂きました。事実女流作家であると思っています。矢萩さんとの出逢いは、二年ほど前に村上家へ再三調査に来ておられたようです。その後本が出版されま

したときに顕彰会へ数冊届けて下さいました。これが縁で本年一月十五日ご自宅にうかがい、顕彰会ではこんな事業を考えていますので是非ご出席頂きたいとお願いをいたしました、ご無理を申し上げて承諾をいただきまして。帰りには、ほんとに有難かったと会長と二人でよろこんで帰りました。

ご活躍を図書を通して見ますと、かなり広範囲に取材や調査に出ておられます、名古屋、大阪そして稲武町にも足をのばしておられることを知りました。こうした中で貴重な忠順との係わりにおいて遊女桜木を研究されましたので、桜木を通して忠順像を語って頂きたいとの思いで今日はお願いしております。

最後になりましたが、いつもお世話になっております築瀬先生ですが、この方も又大府にお住いで経歴は書き切れないほどありまして、皆さんのパンフレットには主なもののみ紹介させて頂いております。

東京都出身、勲三等瑞宝章受賞、早稲田大学国文学科卒……以下ずっと書いてありますが、まだまだ書き切れないほど立派な経歴をお持ちの先生であります。先生よりも顕彰会を一番ご支援いただきお世話になっ

ている先生であります。

現在も講義や会議等に出席されまして、最近はおつばら奥さんと国内旅行を楽しんでいると、おっしゃっておられます。実は今日も旅行の予定があつたけれども今日のシンポジウムのために旅行の日程を変更し明後日から旅に出発されるということですから。

実はもう一つ内所の話がありまして、先日先生のお宅へ伺ったとき……これは先生言っただけでいいのでしょ……金婚式を迎えられたそうでお目出度うございますと言いました。先生白く金婚式は五〇年だけれども私には幼な馴みからのプラスがあると若かりし頃の告白をされました。ほんとに仲睦まじいご夫婦であります。

今日はごいっしょに来て頂くとうれしかったわけですが都合により先生お独りで来て頂きました。

金婚式をお祝い申し上げるとも本日大変ご無理を申し上げご出席頂いたことに感謝しご紹介にかえさせて頂きます、築瀬一雄先生でございます。

それでは早速、近藤先生から発表して頂きます、先生よろしくお願いたします。



近藤 ご無礼を
いたします。

先ほどお案内が
ございましたよ
うに堤の西山の
座でございます

て地元のいちファンということで今
日は村上さんのお話を申し上げたい
と思います。後で真打ちも控へてお
みえになりますのでご指導を仰ぎた
いとそんな気持ちでございます。

私自身忠順さんの病院から小学校
へかよったような経験もございます
ので、そういう意味では大変親しみ
があります。それ以上にある意味の
崇拜的な、神様のような存在の方で
ございますので轟の引倒しになるや
も知れませんが、ご勘弁いただ
きたいと思っております。

さしあたりまず申し上げたいのは、
地域の文教の災をとして頂いたと
いうそんな気持ちがいいたします。

先回復刻されました第三巻にもご
ざいますけれども、忠順さんの門人
を調べてみますと新馬場の田中増次
郎さんを始め上町の石川さんとかな
つかしい名前が一つは出てまいり
ます。前林の中野為三郎さん、西山
の近藤鉄次郎さんとかいろいろ出て
参りますけれども、そのへんを振り

返りながら調べておりますと一五七
人の門人をもってみえた。四十二年
間の記録でございますけれども一五七
人とはいうけれども実際に地域の文
化のほんとうに一番の礎を築いてみ
えた、そんな感じがいたします。門
人の中には旧高岡村だけではござい
ません。高取、新堀といろいろござ
います。けれども岡崎を含め遠くは
出雲の松江のあたりのへんまで自分
の門人をもっておみえになりまして、
色々ご指導してみえたようござい
ます。

そういう意味では、地元を含めて
大変広い範囲からものを見て考えて
来るべく明治維新の地ならしをして
みえた、そんな思いがいたします。
そこでまず申し上げたいのは地元の
言えは文化の灯を明治維新の一番の
下ごしらえをしてみえた、そういう
方だと言うことでございます。

それから二つ目に申し上げたいの
は、これは後で平野さんの方からご
指摘がございましょうけれども名利
といえますか名譽やその他をあまり
重じられなかったと言いますか大変
白い山梔子の花の似合うようなお方
ではないかと思っております。

と申しますのは大田垣蓮月尼さん
あたりからも京都へ出たらどうとい

う話もございましたけれども、確か
にそういうのもいいかも知れないが、
地の利を得ていますからといって、
やんわりことわられて、そのまま地
元にみえる、そういうあたりを考え
ましてもほんとに名譽より地元のた
めに頑張っていたいたような地道
な方の忠順像を浮べるわけござい
ます。

ときとして、東の羽田野さん、国
学者でありますけれどもそれに比べ
まして西の村上と言われたくらいの
大変な方でありまして、後で申し上
げます、明治維新あたりのバックボ
ンとして支えてみえたそう思います。

最初に自分の紹介がございました
ように市の教育委員会の本を作ると
きに、七年前になりましたか、村
上家へ通わせて頂いてお話を伺った
んですが、そのときにはさほどに実
は感じませんでしたけれども、それ
から以後いろいろ調べてみますと、
明治維新の辺りの忠順さんの動きと
いいいますか、今さらながら大変敬服
し尊敬の念を抱かざるを得ないとい
う状態でございます。だから明治維
新の変革のときに大変な言えば庶民
の支えとして控えてみえたそういう
精神的なバックボーンになってみえ
たことを痛切に思います。

例えばでありますけれども当時、島
崎藤村の「夜明け前」という作品が
ございますけれども、あれは馬籠の
あたりのへんの青山半蔵というのが
中央政局の動きを国学者の仲間から
聞きながら地方の芽を耕しておりま
す。

その動きと呼応するように忠順さ
んも中央の動きを見ながら三河のあ
るいはこの高岡の刈谷藩の支えにな
つてみえた、そういう大変大きな精神
的なバックボーンといえますか働き
をしてみえたということを痛切に思
います。

明治維新が上から薩長主導で動い
たように思いますけれども実はその
裏側で地方に忠順さんのような国学
者を含めた狼煙が方々にあって出来
た業なんだと痛切に最近思うのであ
ります。

ですから地元としてある意味では、
明治維新のほんとに大きな支えをして
みえた働をしてみえた忠順さんでは
なかったかなということをおもうので
ございます。

それから三つ目といたしましては、
これは人間像になるかどうかかわかり
ませんが、大変筆まめなお方では
ないかと思えます。色々書かれた
文字を見させて頂いておりますけれ

ど大変細かい文字でしかも活字とそ

う変らないような端正と申しますか
くずれない文字を沢山書いてみえま
す。「三河雑抄」なんて本がござい

ますけれども七〇〇ページにおよぶ
本であります、その中に三河地区
の關係をした当時の読まれた本、記
事等々から色々集めたそういう本が
ございます。その忠順さんの文字と

かその他見ましてもほんとに始めか
ら終りまで、僕はラブレターを書
いてもいつい始めはしっかり書き

ますけれども途中から文字が乱れて
まいります。忠順さんの書かれた文
字を見させて頂き、背すじといいま

すか肩が張るといいますかほんとに
乱れがないそういうところから、す
ごい人だなあということ痛切に思

わさせて頂いております。どうでしょ
うか二ミリ真四角くらいの文字もご
ざいますし、中には注を入れる場合

に、ほんとにぎつり詰まるような
小さな紙に書いて、しかもその紙も
反故紙であつたり色々しております、

そういうのに端正な文字できちっと
書かれていたそのへんから先ほど白
い山梔子と申し上げたですけれども私

自身そんな感じがいたしまして、大
変乱れない潔癖なと申しますかあ
る意味では頑な一面があるんじゃない

いかと思つています。

それから平野さんの方から学究的
な忠順さんの像がたぶん浮かんで来
ると思ひますが、とかく私達は名譽

を先んじて、いいかげんなことをは
たりをきかせながらやっていきます
けれども先人の先輩達の研究したこと

についてはびしっと先輩諸氏の働を
認めていくあまり自分の我を出さな
い、標注等々におきましてもそれを

見させて頂いて、言へば自分の私利、
名譽のためじゃないという、そのへ
んあたりの姿勢がずうっと生涯つら

ぬかれていたように思われます。
それから四つ目に申し上げたいの
は、和歌をたしなんでおみえになり

ますけれども大変沢山おつくりにな
っております。生涯含めて六万近いじ
やないかと思われすが十九年間で二

万五千余という記録もありますし、
それから以後明治の十九年でしたが
お亡くなりになる四年ぐらい前まで

の間に一万五千六百四十とか記録が
ございますので、記録に残っている
だけでも五万五千二百四十首というの

がございまして、中には一晩で千首、
一時間で百というような大変早く作
つて行かれるようなスーパーマンであ

つたようでございます。中味につきま
しては又色々作風等々につきまし

ては後でお話があるうかと思ひます。

それから頑なということを申し上げ
けたわけでありませうけれども。
五つ目として親子にわたつて国学

にといひますが逆にいうと勤皇につ
くされたというそのへんのあたりの
言へば意志の強い人柄を感じるわけ

であります。自分の次男だったと思
ひますが忠明さんを天誅組の松本奎
堂さんの方へ参加させたり、させた

んだと思ひます、このへん僕もよく
わかりませんが自分はそんなふう
に考へております、自分の意志とい

ひますか考へ方を子に伝えながら、子
もそれに賛同して参加をしたとい
うぐらいのいわば親子二代にわたる大

変強い意志といひますか太い棒のよ
うなものがあつたような感じがいた
します。

いろいろ申し上げたんですけれど
も僕自身忠順像として描いておりま
すのは、まず一箇は大変心が透明な

方であつたということと思ひます、
これは後で色々話がございますけれ
ども先ほどの標注といひますか本に

書かかれることについてもそうです
し、それから都へ出て来いと言われ
ても腰を上げられなかつた、そのへ

んのあたり地の利がありますからと
やんわりとことわられるあたりを合

めてそんなふうに感じます。

それから学究的な人といひますか
学問中心の人といひますかむしろ国
学者、歌人といひます名前が出て来

ますけれどもその中の看板で一番合
つてゐるのはやっぱり学者さんなの
かというのを思ひます、張つた

りのない地道なしかも着実な研究を
なさるそういうお方であつたと思
ひます。

それから文字の方から考へまして
大変端正な方、おうちへ帰られても、
刈谷城から藩医さんをやつてみえて

三里の道を帰り、しかも八時ころ着
くわけですからそれから水をかぶつ
て読書を始めて、夜中の二時、三時

というのが普通の方であります。
そんな記録もありますし、寒い中
でも大變身を引きしめて正座をしなが

ら読書されたということもお聞きし
ております。

それからお孫さんの記録なんかに
よりますと寝る以外横になつていた
姿が無かつたというくらいの大變び

しゃとしたそういう方だということ
を思ひました。

ですから文字からいって几帳面な
ところもあるかも知れませうし頑な
一面や大變強い面もあるうかと思
ひますけれどもそのへん色々お話を伺

えると思います。

それから物を大事にしてみえたというあたりのへんも村上家当主さんから色々お伺いしております。紙がなかった訳じゃありませんけれども反故紙を使って記録をしてみえたことやら、本の註釈を入れるのにそこらへんの広告の紙の裏側を使ったりというような感じの方でありますので大変自分の私生活の方は質素で儉約をされてむしろお父さんの豪遊に對しても大きな目で見ながら自分は大変生活を引きしめてみえたそんな感じがいたします。

そのほか一度ご指導を仰いだ先生方の短冊なんかはちゃんと大事にされて命日に御神酒をあげて感謝を申し上げたというぐらいの方でございますし、まあ偶像として私たち地元で考えておりましてある意味では憧れに近いそんなものがございますのでいろいろ間違いもあらうやと思いますけれどもご指導を仰ぐということとで、最初の概要をお話を申し上げました。ほんとに白い山梔子の花の似合うそういうお方ではなかったかなということを痛切に思います。

以上です。

司会 ありがとうございます。大変わかりやすく、ほんとによく調査

されているなと感心して聞かせて頂きました。

いかに忠順翁は勉強家であったか、先生は白い山梔子の花の似合う人という表現でお話し頂きました。

やはり、京の都への誘いもあったわけですがうつつと田舎で過ごされたというお話も聞かせて頂きました。大変よくわかるお話で忠順の一面が浮き上がったものと受けとめさせて頂きます。

司会 つづきまして平野さんから村上文庫を通して忠順のお話しを受け承りたいと存じます、平野さんよろしくお願いいたします。



平野 失礼いたします。刈谷市中央図書館の平野でございます。

五年間当頭彰会に私は初めから関係がありまして、五年を迎えられ誠にありがとうございます。これからもよろしく願っています。忠順翁を簡単に忠順といいますが、れども名前は忠順とこれはご自分の日記の中にふり仮名がうってあるようでございます。私が図書館に入った当時はまるきり村上文庫とは縁がなかったんですけれども、たまたま

よくわからない本がありまして、目録の中から探して、やゝこんなところにあるよ、ということから村上文庫をやることになりまして、昭和四十五年からですが一年程ちがう仕事をやってましたので四十六年から、今年までやらせて頂いております。ふしぎな縁でございます。

忠順翁を簡単に申し上げますと、お父さんが忠幹さん、お母さんが深見美志子さん、それから新馬場とかなかなか読めないんですけれども、当時としては刈谷藩のおそらく三里ですから十二キロもあったところをお駕かになかで行かれたり馬で行かれたりいろいろあったんだろうと思いますけれども大変なことであつたと思います。

ただ昔の市立刈谷図書館の裏手に役宅があられたそうでそこで急用のあるときにはお泊になっていたであろうと思います。

簡単に申し上げますと幼名を賢次さんと書いてあるんですけども、実は書を見ますとこの賢次だけではないわけでした健康の健に次でしたか二でしたか村上山家で見せて頂いたときにはそんなような書もございました。字を承卿蓬廬と号すということが書いてございますけれども初め

はどう読んでいいかわからなかったですね、ジヨウケイなのかジヨウキヨウなのかこのへんは一応私の方ではジヨウケイと統一させて頂いています。それから蓬廬というのはあくまで音読みでございますが、日本の言葉でいえばよもぎのいおりであろうと思います。字といいますがこれは上の方にお出しする手紙とか申請書とかいわゆるへりくだった名前でございますまして本名ではございません、だからえらい人に出すときあるいは愛知県なんかに出す出版許可を求めるときは承卿とこの名前を使って申請をしておられるようです。おそろく私が思いますには、おじいさんの忠直さんという方は、村上文庫の中に角印なんですけど右が源になっていましてそれから顔、それから左側に忠直、こういう角印がございますので、忠順翁だけが集められたわけではなくて代々伝わっているものがそうとうあるだろうと思います。

それと不思議な縁でございますけれどもお兄さまの直武さまが二十七、八才で亡くなっていると思いますが、おそろくお兄いさんが一寸と生きて見えて天保元年に亡くなっていますかね。お父さんが亡くなるまでお兄さんがご

存命であれば忠順翁には刈谷藩医の職は廻って来なかっただろう、だから不思議な結果だろうと、もしということは良くないんですけれども、もしそのような状態であればもっと学問に打ち込んでみえたかなあと、わゆる公務につかれずに、お宅の方でお医者さんをやらねがらという気もしないでもないですね、だからもっとすばらしい仕事が出来たんじゃないかと思っております。ただ医学の先生としましては尾張藩といましようか名古屋藩で加藤敬順ただこの方は今、名古屋叢書にほんとに二、三行しか書いてございません、お目見得程度の方であつたようで、それから多分そういうところの名簿に載るのは本名ではなく、たぶん字であろうと思います。聞くところによりますと多治見の方ではなからうかという話があるんですけれども、あまりにも加藤は多いし調べるのが一寸と不可能に近い、それほど有名な方ではなかったんだろうかと或いは本名が伝わっていてそれの方で出ていて敬順という名前ではあまり出ていないのかなあとそういう気がします、これから又、更に勉強して行けば何にかわかつて来るかと思ひます。

嘉永二年に和歌として本居内遠に入門されております。刈谷藩医ではございましたけれども刈谷藩ではそういう学問的な指導をされている。お殿様にも和歌の進講をされたり、それから藩士に対しても国学とか漢学とか色々な学問を講議されていると聞いております。

おそろくうちの方では、先ほど近藤先生が言われた通りなんですけれども恐らく近くの方の学問を見られるぐらいのことはしてみえたかも知れませんが、その辺のことはよくわかりません。

約二万五千冊の図書を私ども刈谷市中央図書館に蔵しているわけですが、おそらくお宅にはまだ相当の図書をご所蔵ではなからうかと思ひます。

明治元年でございますけれども有栖川の宮にお仕えして駿府、今の静岡に出仕されており、明治四年に宣教師という、これは今のキリスト教の宣教師ではございませんで神道の関係の宣教師で役職が明治四年の太政官布告か何にかにあったと思ひます、で又五年には神祇官の祠官となっており、明治八年「標註古語拾遺」という古語拾遺の標註本を出版され明治十七年十一月二十三日に七十三

才で没したということになっているんですけども、これが正しいと思うんですが人名辞典なんか見ますと、文政九年に生まれたことになっているんですが、文化と文政の間違いでございます。五十何歳と書いてある、そういうものがございまして。

おそろく文化九年と文政九年の間違いであらうと思ひます。それでは村上文庫の方に移らせていただきますけれども、大正三年でございます戸俊治先生という方とそれから大興運輸の三代前でしょうか藤井清七社長とこのお二人で一っしょに購入されたんでしようけれども藤井さんの寄贈された本の中には大正記念藤井図書と印が押してある、穴戸先生の方には印が押してございません。だから区別するなら印を押し忘れない限り、穴戸先生から頂いたのが何も印のないもの、それから大正記念云云というのは藤井さんから頂いたというふうに分けることは出来ると思ひます。その当時としまして実は刈谷町にはなにもございませんで、書庫も閲覧室も、一っしょに寄付された、それで刈谷町立刈谷図書館が出来まして現在の刈谷市中央図書館へ発展をして参っております、

したがいまして現代のこういう文化面を高める上に非常にいいときに造って頂いたと思ひます。

本につきましては現在の分類とは一寸と違ひまして一門から十門までございまして神祇の一というのは今でも一っしょなんですけれども宗教、哲学、教育、あの宗教、哲学も一門でございますが教育は三門、現在では三の分類になります。文学は九、語学、修辭は八という、それから歴史地理は二になります、それから法制、経済、社会というのは三の分類、数学、医学等は四の分類、兵事、産業、交通、家庭でございますが、この中でも六の分類と五の分類にわかれ、それから美術関係は七の分類、それから全書は、ゼロ、隨筆については九の分類になりますけれどもその他はゼロということになります。十につきましては現在もゼロの分類、だから古書の分類と現代の分類と相当こみ入っておりますので、そのままだてはめられると、今のものとは違ひます。

村上文庫の特色として一番いいのは系統的に集められている。西尾市に岩瀬文庫というのが十萬冊ございましてけれども、物もいい物はあるわけですが系統的に集められていない

ように思われます。

ただし、現在、伝っているものとしては非常にいいものが多くございます。学問的なレベルで勉強されるためにためにはもちろん岩瀬文庫は必要ですけれども、村上文庫を勉強されると非常にこの本が必要だから又買っている、これを勉強するためにこれが必要、というふうに非常に計画的に集められているように思います、それと主に江戸時代ですけれどもその出版の概要がわかります。

それと同時に、三河とか尾張、とか名古屋とかこの近辺の学者さん達のもの非常にこまめに集めてあります。将来そういうものを更に研究されるには非常にいいものだと思います。

それから蔵書印でございますが、お手許資料には横井孫右衛門と文禮館のものしか書いてございませんけれども、「芸文東海」という学術雑誌を、築瀬一雄先生が中心になられまして、ご発行いただきましてその中には村上文庫の印譜が百くらいでしょうか収載されています。

これは、だれの印譜だとか、もちろん印譜がありまして名前がわからない方もございますけれども将来またわかったときには順番に勉強し

て頂ければと思うんです。

一番むずかしいのは篆書でございますね。やはり普通の漢字がわからないのに篆書がどういふのかわからなかりません。いわゆる印鑑に必要な字が彫って押してありますので勉強にはなるが非常にむずかしいものです。この中で横井孫右衛門というのが俳諧で有名な尾張藩といふんでしょうか名古屋藩といふんでしょうかその家老でした横井也右といふ有名な方がございます、その方の印譜が非常にめずらしいものだと思いますが伝わっております。

それから村上文庫の目録でございますけれども、大正三年に寄贈を受けてから、先年亡くなりましたが森銃三先生、その当時は亀城高等小学校の先生をやられながら、穴戸先生にも指導を受けられ、それともう一つは鶴舞図書館へ行かれて指導を受けられているんじゃないかと思いますが、三年間かけられました。更に昭和十一年に再刊をされております、それで又今日ご出席いただいております築瀬先生のご指導を得まして昭和五三年に村上文庫図書分類目録を発刊させて頂きました。その当時築瀬先生は豊田工業高等専門学校の教

授という忙しい方でございましたが非常に快よくご協力頂きまして有難く思っております。その際なんです蓬廬雜抄の内容細目と百二十冊あるんですがその中にはものすごく細かいものがたくさん作ってございまして、まだその分がコンピュータに入っていないのでなるべく早く入力したいと思っております。

それと「刈谷町方文書」これも一つしよに入れさせて頂いています。

つぎに文化財についてであります「刈谷町方文書」とともに昭和三十三年八月に「典籍村上文庫」という名称で刈谷市の文化財に指定されております。なかでも貴重なものとして「文選」の直江版という版本が伝っていますがこれは米沢藩の家老で三十万石をもらわれていたという直江兼続という方が出版されて、これは銅活字といわれているわけですが、京都に要法寺というお寺があるんだそうですが、そのものが銅活字であろう、まちがいなく銅活字とっているんですが、この本が銅活字かどうかということはまだ確定していないようです。

それから次に「伊勢物語」これは角倉良以という方が京都にあらわれまして、その方のお孫さんで角倉

素庵という方が京都の嵯峨で作られました、したがって地名では嵯峨本と、苗字から「角倉本」といわれているものでございます。

それから丹緑本というのがございます。「無常重夢物語」二冊の本でございますが非常にきれいな本でございますまして、今の絵本ではございませんで、その当時の絵本とか草紙、なんとか草紙に挿絵として使われていたようであります。

つぎに奈良絵本というのがございます、ここでは「唐土物語」又は、「もうこしものがたり」としてありますが現在はどうも唐土物語といふうに一応統一されておりますけれども原本を見ますとよろこしと書いてある部分がございます、それともう一部「すみ吉」というのがございます。これは奈良絵本といえますものの室町末期ころから出た本だろうと思います。

あとこの村上文庫がどのように利用されておるのかでございますけれども昭和五十一年に国文学研究資料館から、たまたまなるべく散逸したときにどこかでこういうものがあつたんだということ、もう一つはこれから学問を進める上で今、東京が中心になっておりますが、なるべく中

央でマイクロにして学者に提供したいという申し出がございまして事業のうち私どものものは終ったと思いますが、現在七千六百六十六タイトルがマイクロフィルム資料目録に収録されております。

私どもの昭和六十年からの利用でございまして平成三年度、今年度は四年度でございしますが、その六年間で利用された冊数一万二千六百八十一冊、コピーが五万三千三百九十七枚が利用されて来ております、以上簡単に説明申し上げますが、先ほど近藤先生がお話になったとおり忠順翁は、非常に学究肌の方でつきつめて考える方でそれが蔵書の傾向にもあらわれていると思います。

私はいつも思うんですが勤皇で先に筆まめといわれましたが確かにそのとおりで一番使っているのが、「郡書類従」その他だろうと思うんですが「郡書類従」にはこう書いてあってここはこうだから、ここは一寸と間違っているとか。それから先程いわれた「三河雑抄」はこんな大きな本でございまして、今ガリ版刷りのものが復刻されて「三河雑抄」という本が出ていますけれども、よくあれだけ一人でやられたなと思うほど、名所旧跡寺院とか寺社関係の

ものが出ております、二千項目くらいでしようか、あの時代に公務を持ちながらの勉強、先ほどの話でもそうですけれども七時半か八時頃にお帰りになつて、まず休けいするときには無いと思います、朝二時、三時まで勉強されて、それも筆を改良されてまして速く書けるように作ってあるとか穴あき紙をたらしめて速く書けるようにされたようです。今でいうと合理的というか非常に速く勉強して、とにかくあの当時というのは本も高かったでしょうからお借りして、普通だと二部つくって、一部をお礼として返すというのがあったんだそうです。がそんなようなかたちもとられたんじゃないか、天保の何年何月何日書写おわんぬ、とかそんなようなことが奥付に書いてあります。

明治十七年に亡くなっていますから、現在でいう官報それから新聞、新聞といいますが今のような新聞ではございませんで普通の冊子になっている新聞なんですけれど、まあ非常にこまめだったようです、もう少しお話し申し上げますと、先ほどでました羽田野敬雄さん羽田八幡宮の宮司さん、この方も羽田野文庫とていうのが豊橋市中央図書館に入っていますけれども、やはり神道という

んでしようか神道学は、三河では忠順さんと羽田さんと、そういう形で競争してみえたんでしようし、いい勉強をされてたんじゃないかと思えます、まだ私も勉強であります、ですので更に皆さんのご協力を得て、いいものを作って行かないといけないなと、今コンピュータには著名は入っているものと内容といったものがあまり出ていません、印譜やなんかにつきましても、コンピュータの上でこういう印譜があるよと、これはだれから傳わったものなのか、いうことを将来やって行かなければ「村上忠順学」といって、おこがましいけれど、そういう形で更に発展して行ければなあと思っております。

本日はどうもありがとうございます。司会 ありがとうございます、皆さんお聞きいただいたように、平野さんは村上文庫を担当され、さすがに専門家としてよく勉強しておられます、今日は、文庫を通して、いくつかのお話しをして頂きました。中でも兄真武さんが亡くなられたから川谷藩医にならなかったでしょう、もっと勉強されたでしょうと言われました、なるほどと思ひながら聞か

せて頂きました、それでもこれだけの立派な業績を残されたわけであります、ただただ敬服するのみであります。

又、文化と文政の間違いもきつとご指摘され、尚おこがましいといながらも「村上忠順学」の今後についてもご示唆頂きました。

司会 それでは次に矢萩さんにお願ひしたいと思ひます、矢萩さんには忠順さんにとって色ばい一面というが大変興味深いお話して私も大変関心をもっております、今日は素晴らしい忠順さんの一面がお聞かせ頂けると思ひます。それでは矢萩さんよろしくお願ひいたします。



矢萩 村上忠順さんにつきましては他の御三方とちとちがしまして知識も大変乏しいもの

ですからこのような場でお話しするには力不足ではないかと思うのです。けれども、少し調べたことを切角の機会ですでお話させていたどうかと思ひてお引き受けいたしました。

最初に一寸訂正させて頂きますが、先程から女流作家というような肩書

をつけて頂いて大変光栄なことでございますけれども、作家とよばれるような作品はまだものにしておりませんのでこのような名前ではおれません、つい先ごろ大学を卒業してないのに大学を卒業したという風に学歴を詐称して物議をかもした議員さんがおられました。なんだかそのようなイメージとダブリまして一寸とそわそわと落ち着かないような気分になりますのでこのところの女流作家は是非はずして頂きたいと思ひます。

私は江戸時代の女性について少しづつ調べている者なのですが、ある方から村上忠順さんのまわりにも歌をよく詠んだ女性がいたということを知りました。それで村上文庫の平野さんのところに行きまして、忠順さんの編集なさった歌集を片端からめくっていききました。

先ほど平野さんが何年間かの間で五三、三九七枚の復写の利用があったとおっしゃいましたけれども、この中の三九七枚くらいは私がとって頂いたものじゃないかと思ひます、それらの歌集の中の女性の歌を見ていきますと、時々遊女桜木という人の名前が出て来るわけなのです、それで大変美しい名前であるという

ことと、遊女という一寸めずらしい立場の女性であるということが心の中に印象深く心に残りました。

この方が忠順さんと、実際に具体的に交流があったかどうかということは少しも思ひませんで、まあ他の歌集からとって来た歌ではないかなどというようなことを考えていたわけです。豊田の中島登喜子さんという方に、村上さんをご紹介頂きました、村上さんのお宅に伺ったことがございました。

そのときは、アメリカの女性の研究家と東京の方々とご一しよだったのですけれども連月の短冊や作品を見せて頂いておりますうちに桜木の短冊が出て来たのですね、それで私はびっくりいたしまして、実際桜木という人が村上さんと交流があったんではないかということをおししましたら、ご当主の村上さんが手紙もあるよとおっしゃったので、またまた大変驚いてしまいました。

私がいまにもはしゃぐもんですから周りの人が、それではあなた桜木について調べて見たらどうとおっしゃいましたので、それじゃやってみようかしらというようなことで桜木について調べることにしたので、村上さんのお宅には手紙が四通と

短冊が四枚とあと小さな手捻りの壺、蓮月張りの壺なのですが、それが一個ありました。

それらが大事に保管されてありましたのでとても貴重なものだというように思ひをいたしたわけでございます。

私が桜木についてその後調べましたところ桜木という女性には幕末に京都の島原という遊廓に生きた人でありました。その「輪違屋」という置屋に抱えられていた遊女でした。

今も京都には島原という所がありまして、お茶屋さんなどが残っております。輪違屋も現存しております。パー、貸し座席を営業しております。皆さんの中には、太夫道中というものを京都で見られた方もあるのではないかと思ひますが、この太夫をかかえておられて、年一回太夫道中というものをしているようでございます。

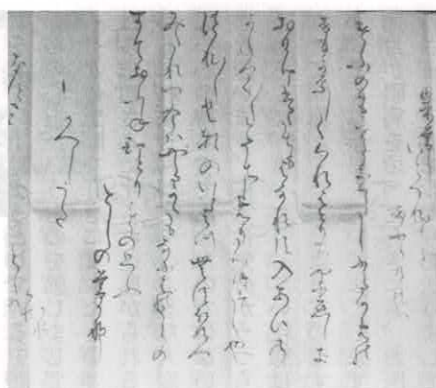
桜木がその遊廓に務めていたということはわかつているのですけれども本名もわかりませんし、生れた場所も、生れた年月も両親がどういう人だったのかということも一切わかりません。後に髪を下して尼になったというところは彼女が歌を残しておりますのでそれははっきりしている

のですけれども、髪を下した後いつ亡くなったのか、お墓がどこにあるのかということもほんとに何にもわからないのです、ただ村上さんのお宅に残されておりました手紙といく種類かの歌集にぼりぼりと出て来る歌と手捻りの壺と短冊が割合いと残っているようです。短冊は築瀬先生もお持ちなのですが私も又築瀬先生のお力でその後昨年でしたか二枚ほど手に入れることができたんですけれども、そんなものだけが桜木という人の存在を確かめるものでございます。

蓮月の許に通ひまして和歌や書を学んでいたということもあったようで、上手な歌を詠むとか、よく書を学んでいるということの評判をとっていたことはあったようでございます。

私が見つけた歌は、全部で四十六首ほどになります。一寸苦労して探し出した歌なんかもございますけれども、ほとんどは村上忠順の歌集の中に採用されていた歌でございます、ですから桜木という人の存在が私達今ここで知ることが出来るのはほんとに忠順さんのおかげであるといつて過言ではないと思ひます。そういう意味では私も忠順さんに

は大変感謝しますし桜木自身もきつと感謝をしているのではないかと思っております。



先きほど申しました手紙を村上さんのお宅で写真に撮らして頂きまして悪戦苦闘しながら読んでおりました頃に築瀬先生にぜひ分貴重なるアドバイスを頂きました。村上文庫には忠順が他から頂いた手紙とご自分が出した手紙とを書き写しておいている「天飛雁」というものがあると教えていただきました。

先生はぜひ分昔にこれを翻刻されておりました、それを貸して頂いて読ませて頂きまして忠順さんと桜木の往復書簡を見ることができました。そのおかげで桜木と忠順の交流というものが急速に具体的に私の目の前

に現われて来たというような経過がございます。

初めは忠順の手紙は桜木の許には蓮月の手を通して届けられ、桜木の返事も蓮月の手を通して忠順の許に届けられていたようでございます。

忠順は蓮月はもちろんでございますが高島式部とか三河の岩上登波子といった女性の方々と積極的に文通をしておられまして、桜木の場合もどのような歌を詠むのか、京都の遊廓とかいふところにいる女性がどんなふうにして歌をつくるのか、そういうものに大変興味をもったらしくて、忠順が積極的に歌をもっと見せてほしいというように申し込んでいるのです。なにか有名な歌に忠順さんは、お酒も嗜まず女性にも近かつかず一所懸命に勉強だけをしたというふうな歌があるそうですけれどもある意味では、女性にも積極的に近づいて、ご自分の文学的な興味を満喫させたというふうなところがあつたのではないかと思っております。女性を蔑視するということうなことは、江戸時代ですのに無かつたんじゃないかと私は思います。それは彼の周りのお母さまとか奥さまとかお嬢さんとか又後で近藤先生にも伺って見たいのですが女のお弟子さんも居

たんじゃないかと思うのですがそういう方々の詠みぶりなどを見ていると女だから出来ないんだとかそんなような考え方には至らなかつたんじゃないかと考えております。桜木も忠順が大国文学者であるというようなことは充分承知であつたらしくて指導して頂きたいという態度で返事を書いております。

桜木は自分が遊廓の中に住むそれを流れの身というふうにいいますけれどもその身の上というものを大変恥ております、武士の娘ではなかつたのかとも言われておりますが大変恥かし思いを抱いたのではないかと思います。忠順や蓮月のおかげで自分の歌が広く世に知られるようになり又刈谷候の目にも触れることにもなり、そういうことを通して少しでも自分の身の外聞を雪ぐことが出来るかと書いております。何度も何度も外聞を雪ぐことが出来たというふうな言つて喜んでおります、忠順の目に歌や書が触れることがほんとに嬉しかったんだらうと胸がつまるような思いがするのです。先程、近藤先生や平野さんのお話で山梔子の花のような忠順さんや非常にまじめな忠順さんだと裏付けるのか裏付けないのかわからないのですが、桜木

の自筆の手紙の一等最初の時期のものに「いついまでも可愛ゆうがらせたまわりました候よう」というような非常になまめかしいいかにも遊廓に住む女性の書き方で忠順さんに書いてある所があります。忠順さんはそれを「天飛雁」にさすがに一切載せてありません。私はそれを知りましたときに思わず一寸とニヤツとしたといひますか忠順さんはこのとき四十三才でございましたので、まじめな男性の純情ととるのか、少々後めいた気持ちがあつたととるのかそのへんはごちゃまぜしたような、私は男性でないのかわかりませんが、そのような気持ではなかつたかと考えております。更に村上さんのお宅には桜木の短冊が四枚あると先程申し上げたのですが、その内の二枚は歌集の中の歌としてとられて残りの二枚は歌集の中に入っていないんですね、それがどういふ歌かというと「いえはへにいほまぐれを行水のたぎつこゝろを人はしらずや」という桜木の歌、それと左甚五郎を題して作った歌で「われにそのひだりてもがなのおもふ人のすがたをゑりてものやいわせん」という少々意味深長な歌なのです、これが歌集を編んだ時期と一致しなかつた

め採らなかつたのかどうか問題でございませうけれども、意味深長な歌ですのやっぱりためらって入れなかつたんじゃないかということも出来ると思います。

手紙には桜木の短冊や歌を手に入れますと忠順さんは何にかしら品物を贈ったことがわかります。蓮月にもずいぶん品物や金子を贈っているようですけれども律儀に色々お世話しております。そして又こんなことを忠順さんは桜木宛の手紙に書いています。『ことにおかしきこともはかなきこともつけしらせたまえ』と書いてあるんです、遊女という立場の女性はやはり大変悲惨な立場でもありますし哀しいことや辛いことがたくさんあると思うんですね、それをすくい上げようとしている忠順さんの心根というものを感ぜまして一べんに忠順を好きになったといったら忠順さんに叱られ迷惑がられるかもしれないが、そのような大変温い心の持ち主であったのではないかと思います。桜木は気分がうつらうつらして、はっきりしない状態になって病気がちだったようなのですが、そんな手紙を書いてよこします蓮月が眼病を煩ったときにも、お医者さまの立場でお薬を送りまして

目に塗って、あけたりとじたりしてるとどんな目の病氣も治るからというように大変親切な処方を書いてるのですが、桜木のことも大変心配してくれたのじゃないかと思えます。丁度上京することがあったのか桜木を一度お見舞ひしますね、それでさぞかし桜木も心強かつたのではないかというふうに考えています。



桜木との交流というのは、たった二年間のことなのです、今残っている手紙の日付は嘉永六年、七年というペリーの黒船が来航したような時期なのですが、そんなときに刈谷の大国学者が一介の遊女と交流をもったというあまり他では見るものできない交流関係というものを私は大変不思議なことのように、又考えさせられることのように思っています。

桜木も一所懸命命書をかいたり和歌

を詠んだりして学んでるんですが、それを忠順さんは大変励ましたに違いないありません。

残念なことにこの二年間の交流しか今のところわかっておりませんのでもっとどこから資料が出てきまして、その後のことがわかればいいなと思っている次第でございます。

以上でございます。

司会 ありがとうございます、時間があればもっともとお聞きしたいところですが、あらかじめお願いしてある時間の中でお話しをまとめさせて頂きました、最初におことわりしなければいけませんでしたが、こちらが勝手に女流作家と決めてしまいました。詐称につながるというお話しもございました、お詫び申し上げます。

それから中島登喜子さんのお話が出ましたが残念なことに、今日ご出席頂く予定でございましたが入院され、大変よくなり三月には出席できるかもと言っておられましたが大事をとって今日は欠席されました、中島さんも忠順について大変勉強しておられます。今日正面に飾ってある生花は、中島さんが届けて下さいました。「旅ころも」それと「旅の歌」この二冊の本を出版されてまして顕彰

会にもご寄贈いただきご希望の方に配りました、そういう方でございます。

さて「輪違屋」は今も京都に現存しているといわれました是非見学してみたいと思いますが、そこに太夫として、又太夫であったのかそうでなかったのかも後でお話し頂きたいと思いますがこの建物は今も残っているとのこと、それから忠順さんは一度桜木に逢っていると聞きました。桜木と手紙を通してのやりとりについては築瀬先生の方からもご助言があるかも知れませんが、ほんとうのおつき合いというのは、やはり忠順さんは親切に桜木を蓮月と共に助けやうとした、桜木の方は一生懸命に学ぼうとした、このようなおつき合いであつたのではないかと思います。

まあ、あまり男と女の関係ではなくて、まじめなおつきあいであつたように矢萩さんがお書きになりました「江戸期のおんな考」を読ませて頂きますとこれが忠順さんのほんとの気持であつたのかと思います、実は「江戸期のおんな考」とはこの本でございます、ほんとによく調査されました、時間があればもっとお聞きしたいところですが時間を制限したにもかかわらずよくまとめてお話し

し下さいましてありがとうございます。

最後に築瀬先生から三人の講師のお話しを踏まえ、又築瀬先生の立場からは是非ご指導いただきたいと存じます。

アドバイスや、後見役として大変でございますがよろしくお願い申し上げます。



築瀬 一 等年
寄りが、一等最後
にやかましい
こと言うとい
ことになるとい
けませんので、

ざっくりばらんに皆さんの今後の、何んと言いますかな、お楽しみ材料をですね、いくつか提供したいと思うんです。

近藤先生と矢萩さんからは、忠順の人柄というような点を中心にお話しになったわけですね、それで矢萩さんの話しは、一方に忠順一方に遊女の桜木というものを掲げるものだから進行役の田中君はすっかりその方へ熱を入れちゃって聞きたい聞きたいとしきりにおっしゃるわけですが遊女に対する考えがですね、今日と当時は違うんですよ。そこそころに問題があるもんですから、ざっ

くばらんにいいますが、矢萩さんが私のところへ、桜木をやろうと思うんだけどこう言うて来たときに僕はなんと言ったかという、桜木なんかよせと、愛知県にはまだ岡崎のお千代さんもあるし豊橋のお登波さんも居るんだから何にも京都の桜木なんか君やることないよと、それがね、私の矢萩さんに対する親切なんですよ、それしたらふくれてましてね先生は片寄つとるえらく叱られちゃてね、それで慰めるために実は僕のところにも桜木の短冊があるよ、持って行ってコピーなりなんなりなさいところ言った。

宝物の短冊をすつと貸してくれるてんですっかり今度は先生好きといわれて……だから忠順が桜木に書いた手紙の内容だったね、僕が矢萩さんを親切にしながらからかったりね、ちゅうらかしたりしている気分、三河弁で言うとな、そう田中さんが期待してるようなね、こういう言葉があるからあやしとか、ひよっとしたらとかそう考えることはないと思うんですよ。

それから一番初めの近藤先生の話しですが非常にまじめな人であったというこれは言えますがね、言えますけどね、やっぱりなんと言

うんでしようね、適当にやった点もあると思いますよ。ええ、私しここに東京都出身とかなんとかね、(司会者、中座から席へ戻る)田中さんもう悪口言っている、今あんたの悪口を言いかけてやめとったんだ、東京都出身とこうしてあるが出身ということは問題ですけどね、私の両親は愛知県人で特に築瀬はご承知のようにこの豊田、今は豊田市ですわね、私は九久平です、ですから本籍は九久平です、築瀬薬局のあれと私は従兄弟です。

だからほとんどの豊田人です、何んなら市役所へ行つて調べてくればいい、本籍地は戦争中は蝸牛(かたつむり)のように背負って歩いたけれども落ちついて、ちゃんと、東加茂郡松平村大字九久平とそういうふうにしたんです、豊田市が勝手に豊田市九久平町にね、勝手に変更したんですが、私は東京にいるときに郷里はて言つと、ああ家康の隣り組だと言つてたんです、松平ですからね、

それで忠順さんのうちへもずい分昔からおじゃましたり、刈谷は、私の父親の出が碧南市ですね、新川です、刈谷も夏休がくると中学時代からもう行っています。私は勉強以外何にも出来ない男なんです、だ

から小学校のころから勉強が好きでした、勉強が好きだとうなるかという、母親はたまじやういでしょう。だから朝になると今日は一寸おなか

が痛いから学校休むと言っちゃ休んでおいて小説を読んだつたですね、日向ぼっこして、そしておなか空いてくると喰べたいという、おなかかわるいんでしょと言われる、いや頭が痛かったなんて、母親はけっこう騙されてくれて、小学校のころからですね小説を散々読みましたね、それで研究が好きで研究するために仕方がないから教師になろうてわけで教師になったわけですが、ほんとうは学校で生徒指導やったり、公務をやるよりもね勉強の好きなんですよ、そうするとどういう手を使うかてえとそう何回も親を危篤にするわけにもいかんしね、そうやたらにおじさん殺すわけにいかんもんだから、適当に葬式だ、や急病だやなんだというて首にならん程度にさぼつては研究しましたね、同じようと言っちゃ悪いけど忠順さんにもそういう手があるんですよ、いつか翻刻した刈谷藩に仕えている時の日記を見るとね、お医者さんがあんなに病氣しますかね、あんなに病氣する医者だったらよっぽどヤブですね。

これは研究のために藩の都合を考
えてですね、そうしたんですよ。そ
れから特別休暇をずい分たのんでい
ますね、さっき目の話が出た（矢萩
さんの話の中で忠順が蓮月に目葉
りを贈った）が自分は、目の方はあ
れだから、福田に有名な目医者さん
がいてね、そこへ特別に修業したい
から、今でいうと長期休暇ですね、
忠順さんもそういう手を使ったと
思いますね、そうして勉強したと思
います。平野さんがおっしゃったよ
うに元の刈谷の図書館あの亀城小学
校の裏側のとこ、刈谷の銀座から入っ
たとこ、あすこに椎の木藪という大
きな椎木のあるあの前に忠順の屋敷
があったんです、これは官舎です、
藩から与えられている。

屋根やなんか雨もりがあればちゃ
んと届を出して、わら何束とか職人
何人とかそうして修理をやっている
から、又、宿直を友達に代っている
す、今宿直ってありませんが私の学
校勤務時代は、宿直がよくありまし
たよ、伊勢湾台風の頃までありまし
たよ、そうすると代ってくれ、代っ
てくれて若い先生は代って宿直代を
稼いだでしょ、忠順の方は人に宿直
を頼んだり自分が代ったりしながら
研究の都合でうまく時間の調整した

と思いますよ、そういうことを含ん
だ真面目さだったんですね、石部金
吉ではなかったんですよ、

一番大きな問題はね、忠順さんね、
藩から月給もらってたんだけど、も
それから代々村上家は立派なお宅だっ
たから裕福ではあったんだろうけれ
どもとにかく二万五千という本をよ
う買ったもんですね、何にが彼にこ
んなに本を買わしたんでしょう、そ
れはね、私はよくわかります、勉強
が好きだったから、それ以外の何に
ものでもない。

今日ではね私でも原稿を書くとき原
稿料が入りますよ、だけど忠順の時
代はね、原稿書いて原稿料が入る
てことはほとんどないですね、本を
出そうと思うとみんな自費出版でし
う、矢萩さんも言ってたんだけど、
歌集歌集と忠順が三河歌集やらなに
やらね玉藻集なんか出すんですよ、
あれはみんなね自費出版なんです、
自費出版はやっぱ歌を出す人が分
担するわけですよ、こんどこういう
歌集を出すからあなたの歌をお出し
下さいというのね、三首出すと何百
疋とこうつけていく、それから本が
出来ると、あなたは何首出したから
何冊あげますと、キブアンドティク
のそういう自費出版で、今みたいに

岩波があったり、角川があったりし
て私が書いて本にすると印税一割く
るでしょう、テンパーセント入って
来ますね私の角川文庫の方丈記は三
十六万でますよ、あれが高い本な
ら倉が建ってるわけ、ところがあの
本安いもんね一二〇円くらいからス
タートして今四、五百円にはなっ
てるちっとも倉は建たんけれども、
それでもやっぱり印税は入ってる。

忠順の時代は印税は入ってこない。
それからしゃべっていて思い出した
「ただまさ」と言うのがいいのか
「ちゅうじゅん」と言うのがいいの
か皆さん真面目だからお考えになる
だろうが漢字で書いたのを音読する
というのは尊敬ですよ、藤原の定家
を「ていか」というでしょ、藤原家
を「かりゅう」というでしょね、
それですよ、だから「ちゅうじゅん」
といって何にも見下しているわけ
でなくて「ちゅうじゅん先生」という
意味にと考えりゃいいんだから、そ
ういうふうにお考えになれば「ちゅ
うじゅん」といってはいかんかしら
「ただまさ」と言わにゃいかんかし
ら、そんなことはない忠順、忠直で
いいんだね、早い話しがもう戦後は
平安朝の女性の名前はみんな読みに
くいもんだから音読することにしち

やったんだね、中宮定子とかそうい
うふう、あんまりこまかいことに
こだわらず「ちゅうじゅん」さんで
いきましょ。

それからこれだけの本をあれした
のは、勉強が好きだから本を買った
と思いますね、それからそのとこ
ろにお寺があつて了観という坊さん
が居ますよね、あの有名な良寛さん
とは違う、忠順の弟子の了観さん浄
土真宗の名鉄のそばのお寺です。
（注・竹元町・光恩寺）鉄のつつか
い棒のある倒れそうな悪口を言うよ
うだけど、あのお寺さんの了観さん
お墓も境内にあります。良観さんが
浄土真宗の坊さんだからしじゅう京
都へ行ってたね、それで忠順は頼ん
でこういう本を探して買って来てく
れ、それから見繕いで買ってくると、
ああこの本はダブったからそれじゃ
岡崎の本屋、本文を呼んでこの本は
いらんから売って、他の本を買おう
と、このように買ってたんだね、そ
れで平野さんが言われたように忠順
の本は系統が立っているというのは、
そりゃそうですよ自分が勉強するた
めに買ったんですもの。西尾の岩瀬
文庫の悪口を言うつもりはありませ
んよ、岩瀬という人は偉い人ですね、
江戸へ出るたびに柳行李に何杯と本

を買って何時は郷里の者が読むだろう
 といって送った。これも一つの郷土
 に対する郷土愛のサービスですね。
 だけど

人間だれでも勉強するのが偉いてゆ
 うもんじあないもの、岩瀬さんは将
 来だれかが勉強するだろうと、そう
 いう訳で本を買ったわけだね、それ
 で建物は代議士の小笠原三九郎さん
 が後で建てましたね、昔はボロでし
 たけど。忠順さんの方は村上前で
 金のいることがあったときに本が流
 出しようとした、それを藤井さんと
 穴戸さんがそれではといて金を出
 して入れ物まで作って刈谷の町立図
 書館が出来たわけですね、こういう
 訳です。

人間の運命というのは色々だけれ
 ども、忠順さんがそうやって自分の
 勉強のために買った本が幸いなこと
 に藤井さんと穴戸さんのおかげで刈
 谷文庫に二万五千いくつ残りは村上
 家にはそんなにたくさんありません、
 自分で書いた日記とか手紙の写しと
 か、それからそういう基本的な資料
 は村上前にまだあります。

平野さんがさっきおっしゃったよ
 うな蓬蘆雑抄も刈谷に行っている部
 分は私が細目を作ったけれども、村
 上前のは四、五冊作りかけて私にく

びれちゃってね、そのままになって
 る、蓬蘆雑抄は是非両方合せてほん
 とうは総目録を作るといいと思うん
 ですがね、それからコンピュータの
 ない時代だから筆まめになるのはあ
 たり前です、今日の大学生に比べる
 と私の方がずうと筆まめです。今日
 の大学生は、これがほしいとすると
 すぐジャーといって十円ですむんで
 しょ、コピーでね、我々ジャーとや
 らなかったからみんな書いたんです。
 だから読めるようになったわけです
 よね、私、学生時代はほんとに真面
 目な学生で上野の図書館へ百年中
 通って写して来た。だから忠順さん
 は筆まめだといってあまりほめられ
 ると僕だってそうだよ、明治生れ
 の反骨はね、そう言いたくなります
 よね、そうなんですよ。

皆さんね、刈谷に忠順の集めた本
 がたくさんあるでしょ、それから村
 上前にも今申し上げたように残って
 るでしょ、忠順さんどんな思いして
 死んだでしょうね、そこを私は考え
 た、私ももう再来年五月になると満
 八十一才になります、学校を永く勤
 めて教育はサボリサボリ、研究は一
 所懸命やったんだが、忠順ほど買っ
 てないけど私もかなり本を買いまし
 たね、何時か役にたつ何時か調べた

いと思って買った本が一ぱいですよ、
 それで考えちゃった、おれは七十に
 なったと、買った本を全部こなさな
 いであの世へ行くのは一寸と残念だ
 なあと、あんまり勉強ばかりして
 国内はよく研究旅行でよく歩いた、
 外国はちっとも行ってなかったと、
 それではやっぱり残念だから、教員
 のワイフなんてかわいそうですね、
 安月給でことに私みたいに本を買う
 男を支えて行くというのはね、それ
 で、しょうがないから七十のときに
 決意して、これから大いに遊ぼうと、
 毎年外国へ行こうと言って七十になっ
 てから、あの栄の地下へ行行って手
 組もうとすると見てもないからお
 よしなさいとこういう、パリやロン
 ドンへ行くところだまっていっても向こう
 から手をかけてくる。

それで外国旅行をね毎年やって、
 学校の勤めも非常勤にして減らして
 トット、トットと今研究してるわけ
 ですが、だって読もうと思ってるわけ
 だ本が全部こなせないで後に残って
 矢萩さんでも持って行ってくれりゃ
 いいけどさ、二束三文で本屋に売ら
 れちゃやっぱ残念だからね、だか
 ら今身辺整理をして自分の買った本
 の研究をせめて少しづつやろうと、
 こう思ってね、年の割に張りきって

やっとなるんですよ、今、近世の尾張
 歌人の研究をやってね、徳川時
 代の尾張の歌よみを二十人ほどとり
 あげてね歌の評釈をやって、もうほ
 とんど原稿が書けた、その次に三河
 の歌人をやろうと思ってる、忠順さ
 んとか篤慶（深見篤慶）ね、それか
 ら八帖味噌のお千代さんとか岩上登
 波子だとか平野さんといわれた豊橋
 の羽田野敬雄だとか羽田野文庫です
 ね、やろうと思ってるんです命あらば
 です。けどまあそう長くはないでしょ
 うからね、皆さんに是非お願いした
 いのは、刈谷と村上前に忠順の本が
 あって、もうあとは無いかというと
 そんなことはありません。やっぱり
 本というのは運命があつてですね、
 刈谷にもない村上前にもないという
 本をここ四年ほどで私三冊手に入
 れました。これは忠順の長女の年之
 さんの日記です、旅行日記です、こ
 れは彼女のハズバンドの深見篤慶の
 日記です、アベックで文久元年にこ
 こを出てですね京都奈良を回ってそ
 して日記を書いているんですね、そ
 れで一等最後に忠順がですね、ああ
 良く書けたよと言ってごほうびにほ
 めた歌を書いていられるんですね、娘が
 可愛いかったんでしょね、文筆の旅
 たつ娘が自分の弟子のお婿さんと旅

行きて歌入りの旅行記を書いて、お父さまこういうの出来ましたご覧下さい、よしよし、読んでやってそいで書いたんだ、残念ながら僕にはそういう娘がいなくて、せめて矢萩さんが何んか書いたらよしよしといつてほめようかと思うんだがどうも今ところ粗が見えちゃってね、だめじゃないか、だめじゃないか違ってるよと文句ばかり言ってるんだが可愛さあまの文句だから、彼女も今にね、とり消した女流作家の玉子くらいになりつつあると思うんですけれどね、こちの方はハズバンドの篤慶が一っしよに行つて別々に日記を書いてんですよ、そうすると賀茂神社の官主の賀茂の正久が友人としてですね、よく出来たよと言ふうに書いてる、楽しいですね、徳川時代の文化人がですね歌を詠む、文章を書くというのはこのためですよ、だから皆さん是非お勧めしたいのは忠順の真似をして歌を詠んで下さい、俳句を詠んで下さい、そして書きなさい、初めは下手にきまつてますよ、だけど書いていくうちにだんだんお上手にもおなりになるだろうし忠順の気持ちを実作をすることによってわかってきますからね、これは東京の上野の文行堂とい

う古い本屋から問いだ一年くらい置いて二回に買いました、私が買えたと言ふことはやっぱり私が忠順に熱心だからこの本が来る来ると言つて来たんですね。これは京都の本屋から買いました、明治七年に出た忠順の神号略記、神様の名簿みたいなもので、單行本だけれども、図書館にはありませんし、村上家にも無いようですね、目録をドンドン送つて来る、さーと見て忠順だとさーと電話かけると買えるところいうわけですよ、今後も気づいたら買うつもりですがまあ死んだら刈谷へでもあげることにしてしまふかね、どうぞ皆さんもそういうおつもりですね、倉のある方は倉を探して忠順の短冊でも書いた手紙でも出て来ないかどうか探して下さい、そしてあつたら大事にして下さい、私も長く女子大の教師してるもんだからよく言います、皆さんのうちの倉に古いものがあったら破つて捨ててはだめだ。読めなかったら持つて来い。決して取り上げないと。価値を見てあげるから持つて来いと、そうすると、ときどき持つて来ます、短冊など、これはこう読むんだよ、大事にしときなさい。やっぱり火に燃えたら終りですもんね、私二十年ほど前に金庫

を買いました、そして金庫屋がびっくりして、ご商売でもないのにどうしてこんな金庫があるんですかというんで、逃げられるといけないから女房を入れておくんだといつて大笑いしましたが窒息死しますね、どんな本でも天下に一冊しかないという本を焼くことは、これは罪ですもんね、だから大事にするために天下一本の本は金庫へ入れておく金庫の中に一万円札は一枚も入ってない、僕んとこの金庫はそういうものばかり入れてある、皆さんのうちでもどうぞ忠順関係のものでも忠順以外のものでもですね古いものがあつたら大事にして頂きたいと思ひますね。

それでこういうものが、私学校へ勤めているもんだからすぐ学校の雑誌にこうやって翻刻をします、こういうものが焼けても万一の場合にはこちの活字になったもんで残るでしょ、それでこう言うものは必ず私に平野さんのところへ届けておく、そうすると、何にも私の名譽のためにこれやってるわけじゃないですよ、忠順さんを受するがために私が研究が好きだから私の出来ることはこうやって公共の施設に差し上げてどうぞ皆さんしつかりやって頂戴と、こういうわけですね、だから忠順さんの資料がもう手に入らないと考えるので、皆さんも、もつと集めようと、村上さん非常に骨を折つて大事に目録をお作りになる、これは有り難いことで、せいぜい利用させていたきたいと思うけどまあ総動員という言葉は戦時調でいかんけれども、この豊田市総動員してやっぱり忠順の資料を大切に、研究者を育てないといけませんね、後の方に私もう目が悪くてよくわからないんだが美人がだいぶんいふしやるんでね、そういう美人方は矢萩さんに負けなように家事は洗濯機や電熱器に任しといて、少し忠順の研究をやつて下さい、女の研究には忠順いいですよ資料がこれだけあるんだから、村上さんと刈谷へ行けば主な資料が見れるんだから、私しかなり翻刻してからの、矢萩さんがおっしゃるよう

に私の翻刻で一ヶ所でも間違ひを見つけると先生違つてたと鬼の首をとつたようにね言つてくるんだね、人間だから間違ひはありますよ、今後はわざと矢萩さんに探させるように間違ひをやつて、言つて来なかつたら、まだわかんないかと言おうかと思つてゐる、それから平野さんがさっき言つて下さつたように私が出してゐる雑誌の余白を使つてね刈谷の蔵書

印の翻刻をずうとやってる、まだ半分も行ってません、これは平野さんを中心は今後やって頂いて篆字は読めませんけどね、読めないって手をこまねてはだめですよ、やっぱりコピーつくってそれを配列して誰かが見て読めるようにする、私自身は自分の蔵書の印譜は全部つくりましたよ、やっぱり大学の紀要にですね、私の蔵書は「碧冲洞」というですが碧冲洞文庫の蔵書印譜を作って、わかんないのは、わかんない誰れか教えてくれと。研究てのはそうですわね、そういうふうにしなさいといかんと思いますね。

まあ、ちゃんばらんばかりで申訳ありませんが、私は忠順が好きです、それで忠順は勉強が好きだったと思いますね、これだけの本を全部忠順がかなり使ってますけれども使い残しもあるし、やりかけもあるんだから忠順の志をついで私はせいぜいやって来たがもうなんといつても百まで生きたって知れてますもんね。皆さんどうぞおやり下さい。

ことにこの地域の方です、郷土のまあ偉人とこうあんまり持ち上げるよりもね、おじさんみたいなつもりで忠順をですね、偉い先輩としてですね研究をして頂きたいと思いま

すね、それから矢萩さんみたいにアウトサイドで忠順がたまたま手紙をこうやりとりしとったから桜木をやる、私がここに出てくる高畠式部を天飛雁でやって全歌集を作りまして、それでこの間だ亡くなった文化勲章もらった青山杉雨、あれは私の中学の同級生でね、高畠式部全歌集のときに、おい表紙書けて、彼が書いてくれました、高畠紫部全歌集はね、忠順さんのおかげで私が歌を集めて、そしてたまたま私が中学で机を並べた杉雨がいたもんだから高畠式部を譜える意味で杉雨に書いてもらってね、いい記念になりましたわね、忠順についてはもっともつと翻刻すべきものがあります。

当用日記風のものが年中日記で、それがかなり村上家にありましてね、私は全部大学ノートへ写しましたよ、写しましたがあれもほんとに翻刻するといんです、文久四年から明治一五年までずーと抜けてるところがありますけれども、文久、元治、慶応、明治一五年まで横帳のいつか豊田の資料館で陳列しました、あれが一日一行の日記です、あれを見ると忠順の動行がよくわかりますね、だけどあんまりね、ブライバシーの問題があるからね、村上家のトラブ

ルがあったことやね、それから息子に勘当したことやね、あんまりあばくのは僕は好きじゃないんだけど村上家のお許しが得られれば、あゝいう日記をですね、お出しになると伝記の研究には楽しいわね、ほんとだね、村上さんどうぞ考えて見て下さい。

近藤先生どうも学生、生徒さんを通じてですね今後あんまり神様のようにな、ほめないでね、おらが村の先輩というふうにして、青少年の心に忠順を浸透させて頂きたいと思えますね。

平野さんには今後私自身もお世話になりますけどよろしくお許しします。こんなことで田中さんお許し願います。

司会 ありがとうございます。何んと言えはよいのでしょうか言う言葉がないほどです。時間が充分なく申し訳なく思っております、大変奥の深いよいお話しでまとめて下さいました。

今日は先生からいくつものアドバイスを頂きました、やはり決め手は忠順の歌を読みなさい、そして書きなさいとお聞きしました。

そして大変よいお話しと助言を頂きまとめて頂きました。ありがとうございます。実は、今日の講師の

方々の前に、矢萩さんが調査された、桜木と忠順の交流についても一寸とこだわりたい気がします。それは、時代の違でさほどのことではなかったと築瀬先生はおっしゃいました、そこで当時遊女桜木が書いた書簡そのものがここにあります、又、短冊もいくつか並べてあります、これは村上家の好意によるものであります。

たぶん白魚のような指で筆をとり書いたものではないかと思えます。皆さん是非ご覧いただきたいと思えます。

それから、今日お配りしました当顕彰会報の二ページから登載してある「東征日記」は築瀬先生が翻刻されたものをお許しを得てご紹介したものであります。忠順の日記であります。

四人の先生方には私からどうぞテーマにあるように忠順像について語って下さいとお願いしましたのでほんとうによく忠順についてお話し下さいました、今日の四人の先生のお話を重ね合わせるにより、今まであまり知られていなかった活字だけの忠順から立体的な忠順さんが期待どおり浮かんで来たように思います。

今日は折角シンポジウムと名をつ

てやっておりますので、皆さんから
どんなご発言を頂き忠順像に迫っ
て頂きたいと思ひます。皆さんどう
ぞご意見ご質問をお願いします。：。
時間が大分超過しているためか皆さ
んご遠慮されています。特にご発言
もないようですからこれをもって五
周年を記念して開催いたしましたシ
ンポジウム「限りなく忠順像を求
めて」「忠順翁を語る」集いを閉じ
させて頂きます。最後に私達の顕彰
会のためにおしみなくご協力頂いた
講師の方々に今一度盛大な拍手をお
願ひいたします。

ありがとうございました。

平成五年三月二十八日

於 六鹿会館

司会者

村上忠順翁顕彰会事務局

田 中 伸 一

おかげさまで

村上忠順翁顕彰会

会長 石川 隆 之



迎えることが出来ました。

忠順翁の研究は、つぎることなく
四年を経た今日、その成果は、万巻
のほんの一頁にも満たないものであ
りましょう。しかし数々の忠順翁研
究者のご指導とご協力を得て着実に
歩みを進めて参りました。この間に
おける市や教育委員会のご支援は当
会に大きな励みとなりました。

おかげをもち、忠順をとりまく地
域の歴史や、幕末期における時代背
景など、又文化の面からは忠順の足
跡をたずね残された書籍や歌は学ぶ
ことばかり多く、その一つひとつは
感動さえ覚えるものであります。

今後更に会員の皆さまと共に会
の充実に努め、忠順翁の顕彰を深め
研鑽を積み、お互いの豊かな人生の
糧としたいと考えます。
今回のシンポジウムにご協力い

おかげさまで
五周年、会員の
皆さまと共に忠
順翁を顕彰しこ
こに大変意義深
い一つの節目を



ただいま講師の方々に深甚なる感
謝を申し上げお礼のことばといたし
ます。

編・集

後・記

早やくも迎えた五周年、発足した
のがつい此の間のように入思ひます。

地味ながらも皆さんと共に歩みつ
づけ確かな実績を積み重ねて四年間
その結果は、何んとむづかしいこ
とかと、一所懸命にとりくみ、やっ
と忠順翁が少しばかり浮んで来たよ
うに入思ひます。

さて、忠順翁の碑をご存じでし
うか、碑は、村上家墓所に接し、日
ごろ人の訪れることもない深い杜の
中に静かに佇んで入思ひます。

ここからは堤村や逢妻川が一望で
き遙か霊峰猿投山も拝せる丘陵高台
です。

碑文は忠順翁の由緒が刻まれて入
ます。安城市の丈山研究会岩月碧水
さんが書写されました。これを慎し
みてご紹介させていただきます。
今回は、シンポジウムと、静か
に佇む「千巻舎碑詞」をとりあげま
した是非ご一読下さい。(伸)